
連載小説 時間研究所

水本爽涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連載小説 時間研究所

【Nコード】

N2896X

【作者名】

水本爽涼

【あらすじ】

時間に魅せられた若者達のSF?的な怪奇物語。

第23回

「八百半やおはんの娘とは、その後どうなってんだ？」

「どおって、別にどないもなつてまへんでえ。沙貴ちゃんさきちゃんは僕の片想いでっさかい…」

「同じ会社なんだからチャンスもあるでしょうが…告白できる…」
私が訊ねたことに、塩山も介入した。

「ハハハ…、二人とも、そう攻めんといて欲しいでんな」照れて、悟君は軽く往なした。この話は、詳しく云っていないが、実は内々に、悟君が私と塩山に打ち明けていた過去の経緯があったのだ。悟君の逸話として、ここで云っておく。

一時間ほどノンビリして、私達は繁華街へ戻った。この町唯一のメインストリートだ。私達が歩くすぐ傍を、爆音を上げて数台のバイクが走り去った。

「この辺りも、だいぶ都会になりましたなあ。賑やかな奴らやな、あいつら…。そういや、八百半のドラ息子も、以前は連中の仲間だったんでっせ」

「広夫君がかい？ そりゃ、初耳だなあ」

「そうでんねん。あのドラ息子、どないもこないもならん奴でね、精吉っあんも手を焼いとりましたんや」

「それは過去のこつたろ？ 今は自転車あんぎゃで全国一周してるって聞いたぞ。余り悪く言うもんじゃない、君の相手の兄貴あにぎやなんだから」

「関係ないですわ。沙貴ちゃんには片想いしてるだけでっさかい」
「都会になっていくのが、いいのか悪いのか…」

突然、塩山が意味不明なひと言を發した。そのひと言で私と悟君の会話は途絶え、ふたたび沈黙の行脚あんぎゃが始まった。白衣姿で闊歩かつぽする正体不明の三人。どう考えても、他人の目には挙動不審に映ることだろう。しかし、当の私達は全然、気にならないのである。すれ違った人々は、医者が三人、横一列で闊歩する姿に違和感を抱くだ

ろうが、まあ不審者と思われることはない、と鷹を括っていた。違和感を抱かれたとしても、“病院から食事にでもお出かけか…”と思う程度だろう、という潜在意識が巡っていた。

歩く道すがら、フラワーショップが右前方に近づいてきた。別に入るでもなく通り過ぎようとしたその時、陳列棚に置かれた時計草の鉢がショーウィンドウのガラス越しに見えた。その瞬間、両脇に二人を従えて歩く私は立ち尽くした。二人は急に私が止まったものだから、？と、怪訝な表情で訝いぶかっている。横一線で歩く三人を上空から俯瞰ふかんすれば、直線模様が一時、V字型に折れ曲がったということになる。

「どうかしたんですか？」

不審に思った塩山が、ポツンと訊ねた。

「いやなあに…、時計草の鉢が見えたので、買おうかと思ったんですよ」

「[時]に時計草か…、いいかも知れないですね」

「そうでんなあ…」

二人も私の見惚れているショーウィンドウを見遣る。

結局のところ、私はその鉢植えを買い求めたのだが、この鉢が「時」のブース、所謂いわゆる、私の部屋に研究所のシンボルとして置かれることになった。

その後、ブースに戻り、少なからず語り合った。

「植物の感性で考えると、動物である私達の動きは、本当に速く見えるんでしょうねえ…。愚かな動きも、利口な動きも、それなりに客観的に…」

「塩山さん、いいこと言うなあ。そのとおりですよ。植物は不動だから、冷静に我々人間を見ているのかも知れない」

「僕もそう思いますわ。樹齢何百年の大木もあるし、長い歴史の中を生きてまんにやさかいなあ…」

「そう、それ。時間の流れの本質を、実は植物の方が知っていたりして…。君もなかなか、いい見方してるよ」

塩山に褒められ、悟君は自慢顔である。その単純さが返って好判断、好結果を生むとも考えられる。とすると、悟君はやはり「時」にとっては欠かせない存在である。

「うむ……。俺達は少し動き過ぎていたのかも知れない。樹木になった気分で、じっと動かず気長に観察すれば、何か掴めたのかも分かんないなあ……。次回からは「時」の方針は、そうしますか？」

「いいですよ」「かまいまへん」と塩山、悟君が同意して、私達は探偵（動）から大木（静）へと行動を変化させることになった。確かに言われてみれば、結果を得んが為に対象に拘り過ぎていた嫌がある。客観的に好結果を得る為には、余りチヨコマカ動いてはいけないことを私達は忘れていたのだ。上手い具合に方針転換できたのも、偏に悟君の奇抜な発想の賜物である。

続

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2896x/>

連載小説 時間研究所

2011年11月14日00時04分発行